図書館報

第129号
平成26年2月24日
大分工業高等専門学校
図　書　館
大分市牧1666番地
TEL　097(552)6084
FAX　097(552)6786

塚原高原の霧島神社～おおいた文学散歩(9)～

〈もくじ〉

題字「図書館報」……（校　長　古川　明徳　書）……1
扉写真:「塚原高原の霧島神社」～おおいた文学散歩(9)～…一般科文系　山田　繁伸……1
大分の歴史的人物を学ぶ……校　長　古川　明徳……2
変革の波に襲われながら……図書館長　篠田　和男……3
おおいた文学散歩（9）　水上勉「木綿恋い記」を歩く…一般科文系　山田　繁伸……4
記憶に残る一冊……機械工学科　山本　通……5
一般科理系　樋口　勇夫……6
一般科文系　Tomek Ziemba（トメック　ジェンバ）……7
平成２５年度学生図書委員名簿……8
平成２５年度貸出上位者・クラス表彰者……8
編集後記……図書館長補佐　鶴沢　偉伸……8

大分の歴史的人物を学ぶ

校長　古川　明徳

大分高専に来て１年半が経ち、２回、春の入学式を迎えました。毎年１６０名余の新入生を迎えますが、本校の特徴として、新入生のほとんど大分県内の出身であり、そのうちの約６０％が大分市内からであります。したがって学生諸君は大分の気候風土に育てられ、大分特有の気質を持っているのではと思われます。先日、電気電子工学科教授の高橋徹先生との会話のなかに「大分(豊後)の三賢人」の話が出、存知あげぬ私は、ただただうなずくだけでした。大分出身そして大分在住の方なら知っておくべきことかもしれません。そこで、ここでは大分の歴史的人物について私が知る限りのことを書かせて頂きたいと思います。ただし真実でない記述もあろうかと思いますが、ご容赦ください。

まずは早速「豊後の三賢人」について調べました。三賢人とは、三浦梅園(みうら ばいえん、１７２３～１７８９、自然哲学者)：国東に私塾を開き、形の理を極める独自の条理学を展開、代表作に『玄語』、帆足万里(ほあし ばんり、１７７８～１８５２、儒学者)：日出の生まれで、政治・経済・天文・医学など幅広い領域に通じ、代表作に『窮理通』、広瀬淡窓(ひろせ たんそう、１７８２～１８５６、儒学者)：日田において私塾咸宜園を開き、『敬天思想』を展開した。代表作に『儒林評』、でした。

広瀬淡窓の名は、私が大学の学部時代に属していました吟詠部の詩吟集で知っていました。話は飛びますが、私が吟詠部に入部した動機は不純で、社会人となっての一芸を持つためでした。学生諸君も、何か会社で自分をアピールできるように宴会芸を一つ持つことをお勧めします。その詩吟集には次の漢詩がありました。

休道他郷多苦辛
同袍有友自相親
柴扉曉出霜如雪
君汲川流我拾薪

これは「桂林荘雑詠示諸生」という題が付いています。さて漢文を習っている諸君、レ点などの返り点を打って読んでみてください。大分とは関係ありませんが、私の好きな詩（朱子の「偶成」）を一句、ついでながら載せておきます。

少年易老学難成
一寸光陰不可軽
未覚池塘春草夢
階前梧葉已秋声

豊後の三賢人は江戸時代中期の人ですが、先日、佐賀で会合がありました折、今度は「佐賀の七賢人」の話が出ました。これまた、私は初めて聞くこと。そこで「知らない」と答えましたら、「佐賀の城跡の周りを散歩するとわかるよ。」と言われ、朝早起きせざるを得ない羽目になりました。「佐賀の七賢人」とは江戸末期から明治の初期に活躍した人達で、鍋島直正(反射炉)、佐野常民(赤十字社)、島義勇(北海道開拓使)、福島種臣(内務大臣)、大木喬任(元老院議長)、江藤新平(廃藩置県)、大隈重信(総理大臣)だそうです。さてあなたは何人ご存知でしたか。その時代ですと、大分では福沢諭吉でしょうか。地元の方々と親しくなるには、まず地元の歴史的人物を知ることが求められます。他県出身の皆さんも郷里の賢人たちについて、一度調べられてはいかがでしょうか。

さて大分に戻って、歴史的人物を考えてみましょう。つぎに挙がるのが、大友宗麟(１５３０～１５８７)でしょうか。大友宗麟は、フランシスコ・ザビエルと謁見してキリスト教の伝道を許すとともに、自らがキリシタン大名として知られています。そのお蔭で、その頃の大分はキリスト教文化と西洋音楽に満ち溢れた町として栄えていたとのこと。大分市街を歩きますと、アチコチに大友宗麟やザビエルに関する碑や像が建てられ、当時の名残を知ることができます。西九州の長崎がオランダ祭りなら、東の大分はザビエル(ポルトガル/スペイン)祭りで町おこしを考えてみてはいかがでしょうか。

そのほか、大分出身の歴史的人物をネットで調べますと、思想家の福沢諭吉(１８３５～１９０１)や画家の田能村竹田(１７７７～１８３５)らが居られます。そしてネット上で、大分人気質として「赤猫根性」との言葉を初めて目にしました。「赤猫根性」とは、足の引っ張り合いをして協調性が無く、一人で何とかしようとする性格を言うそうです。皆さんはどう思われますか。私が接する大分の方々に人懐っこさは感じても、赤猫根性は微塵も感じられませんが・・・。冒頭に述べましたように、本校の学生諸君のほとんどが大分出身、大分人には潜在的に「赤猫根性」が宿っているのではと心配されます。諸君らが旅立つ社会は「協調性」が「国際性」とともに求められています。どうぞ、寝た子を起こさぬように制御・克服してください。

大分は西を険しい山々に囲まれ東を海に面し、気候も温暖な瀬戸内海気候に属して、人々は常に東を見て生活しているように思います。東には関東・関西、そして太平洋を越えて米国があります。大いに羽ばたいてください。と書きましたように、一つの会話から自分の無知を知らされ、調べものをして知識を深めることができます。調べの始めはインターネットからでしょうが、それでは上辺だけで終わります。更に知識を深め、その背景を知るのに関連する書物を読むことをお勧めします。図書館では、皆様が読みたい本を適宜揃えて参ります。どうぞ図書館を大いにご活用ください。

変革の波に襲われながら

図書館長　篠田　和男

大分高専図書館には現在約８万冊の蔵書があり、そのうち約３万冊は開架図書として自由に閲覧することができます。閉架図書の利用については受付でお尋ね下さい。蔵書の検索は閲覧室やご家庭のパソコン等から可能です。大分高専のウェブサイトで図書館のホームページを開き、蔵書検索をクリックしてご利用下さい。館内では、他の図書館の蔵書検索や電子媒体の学術雑誌を利用できます。国内外の情報を入手できますので、ぜひ足を運んで下さい。本校が設置している４学科の専門書はかなり充実していると自負しています。特に土木工学の分野については、大分大学にその学科がないことから、当館をご利用になられるのがよいかと思います。工学分野の他に、青春期の学生の心の成長の糧となる幅広い分野の書籍も備えています。

当館には本の寄贈もいただいています。最近では、本校第一期生であり教官でもあった後藤智行先生が、初代校長松尾春雄先生の教え「愛の精神」を後輩たちに受け継いでもらいたいとの思いからカール・ヒルティ著「幸福論」全３巻を寄贈して下さいました。創立時の先生方と学生たちの情熱を感じて、新たな時代の大分高専を築いていく礎としていただきたいものです。ぜひご覧下さい。

図書館は高等教育機関の心臓部です。人類が築き上げた英知の宝庫です。貴方にとって思わぬ宝石が眠っているかもしれません。膨大な本の森を探検してみませんか。現在私たちが享受している文化や技術は、人類の長い営みのどの時点で生まれたのか知りたくはありませんか。貴方は将来の子孫にどのような新しいものを残すことになるのでしょうか。図書館は、多忙な日常のなかで忘れがちな、人類の発展という大河を思い起こす貴重な場です。自分の立ち位置と役割を再確認する場ではないでしょうか。ちょうど、体調が悪いときに病院に行き、再び元気を取り戻して活躍できるように、なぜ自分が生きているのかが分からなくなったときには、図書館に行って精神の元気を取り戻してみるのもよいかもしれません。

こんな格別の空間を本校の所属者のみに閉ざしておくことはもったいない話です。当館は以前から市民に開放しています。ご存知の方にはよく利用していただいていますが、当方の努力不足もあり、広く知られていないのが現状です。本校は国立で、市民が納めた税金で運営されていますから、ぜひ当館をご利用いただき、社会人の目で見て、日本の将来を担う若者にとって有意義な図書館のあり方についてご提言をお願いします。意見箱は閲覧室入り口に設置しています。

情報革命という言葉が聞かれるようになってかなりの年月が経ちましたが、最近はほとんどの人がその言葉を知識としてではなく実感していることと思います。あらゆる分野が情報技術を基盤に急速な発展をしています。図書館も例外ではありません。すでに当館では電子学術雑誌をオンラインで利用できますが、世界の図書館に目を向けてみると、変化はさらに急速で驚くようなアイディアが次々に生まれています。その一端をご紹介してみましょう。

東北大学附属図書館のウェブサイトでは、学生が購入図書を申請したり、「アルゴリズム百科事典」等の電子書籍を自由に閲覧することができます。英国ケンブリッジ大学図書館内では無線接続でパソコンを利用することができます。神戸大学附属図書館では、所蔵資料の展示会を定期的に実施しています。米国ハーバード大学図書館では、スタック・ヴューというソフトで開架図書を眺めるように蔵書を画面に表示し、色により利用頻度を示す実験を行っています。米国スタンフォード大学図書館では、知識を広く大衆に公開するため、グーグル・ブック・サーチに200万冊の蔵書のスキャンを提供しています。世界中の図書館をリンクして情報を提供することで、データを暗い書庫に眠らせるのではなく、リアルタイムで提供できます。フロッピー・ディスク等に記録されたデータは、記録形式の進化と共に失われる恐れがあるため、古文書の電子化にも取り組んでいます。

建物はありませんが、プロジェクト・グーテンバーグは現在４万２千作品の電子本を提供しています。著作権が失効したもので、インターネット上で無料で読むことができ、さらに10万点の電子本にアクセスすることもできます。また、自分で書いた電子作品を無料でインターネット上で出版するサービスも提供しています。

ますます多くの情報がデジタル形式で提供される時代に合わせ、図書館は人類の英知である情報を紙媒体で保存するばかりでなく、加速度的に発信される電子情報という媒体でいかに効率よく安全に収集し保管していくのかという課題に取り組む時期にきていると言えます。その実現にあたっては、専門的技術をもった人材の確保、時代の経過に耐えうる保存形式の採用、費用の確保、著作権法等の障害の解消等々、解決すべき問題がたくさんあります。果たして、単独の図書館でできる改革なのでしょうか。図書館の本来の目的を達成し続けていくためには、情報革命という社会基盤の変化に何としても対応しなければならないことは言うまでもありません。高専の図書館はスケールメリットを生かした効率のよい運営で、技術者集団という強みを発揮した最先端の図書館を実現できる有利な環境にあります。それを生かせるか否かは、関係者次第です。

おおいた文学散歩（9）

水上勉『木綿恋い記』を歩く

一般科文系（国語科）　山田　繁伸

文春文庫の表紙カバーに「“豊後富士”由布岳のふもとにいたころの由布は、父と弟を失いながらも、母と二人貧しいなり幸せだった。しかし、戦争は由布がひそかに慕っていた青年を奪い、敗戦後の疾風怒涛は彼女を思うさま翻弄し、運命の不思議と残酷さの中に投げこむ―日本の女の一生を美しく描いて他の追随を許さない作者の傑作長編」と解説されている。

水上勉の代表作「越前竹人形」の玉枝、「五番町夕霧楼」の夕子と言った主人公たちは、薄幸のうちに人生を閉じてしまう。ところが、水上作品には珍しく「木綿恋い記」の主人公柿本由布は、薄幸のなかを強くたくましく生きてゆく。前半の戦前から戦中は、別府、湯平、由布院を舞台に物語は展開し、後半は、上京した主人公の結婚、出産、離婚、事業、知人の死……と波瀾万丈の人生が展開する。読者には、主人公のエネルギーが乗り移る。

主人公由布は、由布院の北に位置する塚原高原の出身と設定されている。由布の名も塚原高原から仰ぎ見る由布岳に由来する。

馬が首をうしろ向きに擡げたようだと、みたのは由布だけだったかもしれぬ。山は、由布のうまれた塚原の北の盆地の安心院のあたりからみると、富士に似ていたので、豊後富士と人はいった。塚原からは近すぎるので富士にはみえず、ただ高いばかりであった。十八歳まで、この山の麓で暮らした由布には、山のかたちは年じゅう同じ型にみえてはいたが、馬や牛の姿のほかに、あるいは熊とも鹿とも、巨大な岩石とも見えることがあった。

主人公は、昭和2年3月25日生まれ。高原の野焼きの日であった。今でも春先、高速自動車道を走っていると、野焼きに遇うことがある。野焼きとその後の高原の変化を水上は次のように描く。

風は山から吹いた。風が吹くと、火は思わぬ方へ広がるので、大人たちは、用心のため、焼いてはならない干草のコヅミだとか、輪型の土地にうつる火を防いで歩いた。広い野原だ。一日では焼きつくせないので、一週間か十日かかった。草がみな焼きつくされたあとに、萌え出る新しいみどりの美しさには、誰もが見惚れた。新芽は四月末、黒茶色に焦げていた大地が、まるで、二三日でぬりかえられたかのように、淡みどりになる。五月がすぎ、夏がくれば、このみどりは濃くなり、陽をうけて草はむれ、うるしをとかしたように光り輝いた。草原には朝夕狭霧が落ちた。みどりはみな乳色にかすんだ。牛はその霧の中へ放たれた。豊後牛は黒いので、火山岩とまちがえるほど山へ散ってみえた。背高い夏草が刈られて、芝草がまず紅葉しはじめて、この頃もまた野焼きかと思うほど赤くなるのだった。

父の柿本岩根は、日出生台の採石掘りの作業員で、母はたねと言った。おとなしい無口の父に対して、母は豪気な人であった。塚原にある霧島神社の甘酒祭りでも母は振る舞い酒をがぶ飲みして酔いつぶれたことがある。由布が十歳の時採石現場で父が事故死をした。そして、戦争が厳しくなってゆくなか、別府の軍人の療養所の炊事見習いに働きに出る。療養所は、亀川の別府医療センターのあるところにあった。敗戦の詔勅は、弟を見舞う帰省にあり、聞いていない。

弟が寝込んだという報らせをうけて、由布は、休暇をもらって別府を十四日に出て、その夕方塚原につき、弟を見舞って、翌日のひる頃に塚原を出、別府にもどっているが、正午にあった敗戦詔勅のラジオ放送は、ちょうど、ガラン岳のふもとを歩いていて聴かなかった。暑い陽ざかりで、由布は長袖のブラウスの上に黒い木綿のもんぺをつけ、黒のズックをはき、防空頭巾を首からうしろへたらしていたが、二時すぎたころに別府へついて、療養所のある亀川の街筋を歩いている時に、奇妙に人通りがなく、静かだったのが、のちのちまで印象ふかく思いだされた。

敗戦とともに主人公の苦難の人生が始まる。それはまた、苦難に果敢に立ち向かう人生であった。主人公をだまそうとする人が出てくるかと思えば、草本医師のように無償の善意を持った人も出てくる。主人公は、さまざまな経験を積んで、たくましく生きてゆく。

水上の妻は、三重町出身である。娘の直子さんは脊椎破裂で生まれ、手術で一命を取り留めた。歩行障害が残った。その治療に当たったのが、当時の国立別府病院にいた中村裕先生である。先生は、後に障害者の働く施設「太陽の家」を作った。「太陽の家」の命名は、水上勉である。「くるま椅子の歌」や「生きる日々－障害の子と父との断章」などの作品がある。「中村裕伝」も水上勉の執筆で、大分、別府と深い関わりがある。

ガラン岳から眺める塚原高原

塚原高原の野焼きあと

～記憶に残る一冊～

ゲーデル・エッシャー・バッハあるいは不思議の環

一般科理系　樋口　勇夫

さて、タイトルとなっている3人の人物はそれぞれ論理学、美術、音楽で偉大な功績を残しているわけですが、この本はこの御三方の伝記ではありません。この本はゲーデルの不完全性定理にインスピレーションを受けた著者が巡らせた思索をまとめたものです。ゲーデルは不完全性定理により数学・論理学が自分で自分自身の正しさを証明できないことを証明しました。正確には、数学に矛盾が無いのであれば、その無矛盾性を数学で証明することが出来ない、ということです。そこには自分自身についての言及、自己言及がもたらす数々の問題、パラドックスが関わってきます。数学・論理学が自分自身の正しさを証明しようとするとき、当然自分自身について言及しなければなりません。自分自身についての命題、すなわち自己言及命題を考え、その真偽を議論しようとするとき、その真偽が判定できないということがありうるのです。実際、「この文は真である」という文の真偽を考えると、どちらでも構わないことがわかります。逆に「この文は偽である」の真偽を考えるとどちらでも都合が悪いことになります。

しかし、著者ホフスタッターの目的はゲーデルの不完全性定理を解説しようということではありません。生命、脳、思考、そして人工知能についてもその思索を巡らせていきます。そしてひたすら論理的に、科学的に述べられていきます。この本では論理・証明・自己言及に関する諸問題をアキレス・亀・樹懶・蟹といった登場人物の対話劇で提示し、その問題について深く考察を記すという構図で書かれています。これらの登場人物のうち、アキレスと亀はゼノンのパラドックスに登場し、アキレスは亀に追いつけないと示されました。そしてルイス・キャロルも自分の文章の中で登場させ、論理そのものに対する議論をさせており、その文章もこの本では引用されています。この一連の対話劇には、エッシャーの版画が度々登場し、それらに見られる「環」と自己言及との関係も示されていきます。

するとバッハは？バッハも自分の曲の中に「B・A・C・H」の順に音を並べた旋律を潜ませるなど、さまざまな工夫を凝らしており、その中のいくつかに自己言及や証明との関係を見いだしています。また対話劇にはバッハの作品に似た題名がつけられており、その作品が連想されるように描かれています。バッハの作品の中には蟹のカノン、樹懶のカノンがあり、蟹と樹懶はそこから出てきたわけです。対話劇は論理について冗談っぽく記述されたものもありますし、言葉遊びを織り込んでいるものもあります。元々の本は英文であり、タイトルはGÖDEL, ESCER, BACH：an Eternal Golden Braid です。このサブタイトルは3人の頭文字G、E、Bのアクロスティック（折句）です。それを活かした訳はどうやら断念したらしいのですが、本文ではできるだけ言葉遊びを維持しようとしています。そんな著者・訳者に敬意を表する意味もありこの紹介文でも言葉の制約を課しています。そのおかげで作業からはじめることになりましたが。

接続詞から段落をはじめる、それが１つの制約です。そのために若干文章の構成がおかしい部分もあるかもしれませんが、その点はご容赦いただきます。この制約は正確にはもう少し厳しい制約なのですがそれはわかりますよね。

それはそうと、この文章は思い出の一冊についてのものでした。この本に出会ったのは大学在学中だったと思います。数学科に入った当初は数理論理学に興味があり、ゲーデルと不完全性定理について知りました。ただしゲーデルという名前からこの本に辿り着いたのではなく、この本の訳者である柳瀬氏の別の著書からこの本を知り、図書館でこの本を借りたのが最初だったと思います。この本は７００頁を超していますので、図書館ではじめて見た時は辞典かと思ったほどです。結局そのときは対話劇を読むくらいで返しました。そのあと何度か借りたことがあり、この文章を書くにあたりまた借りて読みましたが、まだ読破はしていません。現在、２０周年記念版を入手し、じっくり読もうと思っているところです。この本を読んでから脳や思考についても考えるようになり、ニューラルネットワークの統計的学習理論を学び、統計学の方へ進むことになりました。統計的推論は論証とは逆に帰納的にデータを積み上げていく方法です。数理統計学は帰納的推論の正しさを論証によって保証しています。また、統計学を始めとした科学理論がその信頼性を示すことで、その根幹となる数学が信頼に足るものだと推論するには十分であるといえると思います。これは論証と推論によって形作られている「環」なのかもしれません。この考えに至るには別の本「信頼性の高い推論」の存在も大きかったのですがここではタイトルだけの紹介に致します。最後にこの文章も環を作って、というかちょっとだけ引っ掛けて閉じたいと思います。いや、環を作ると最後ではなくなるのかな？・・はて

文献

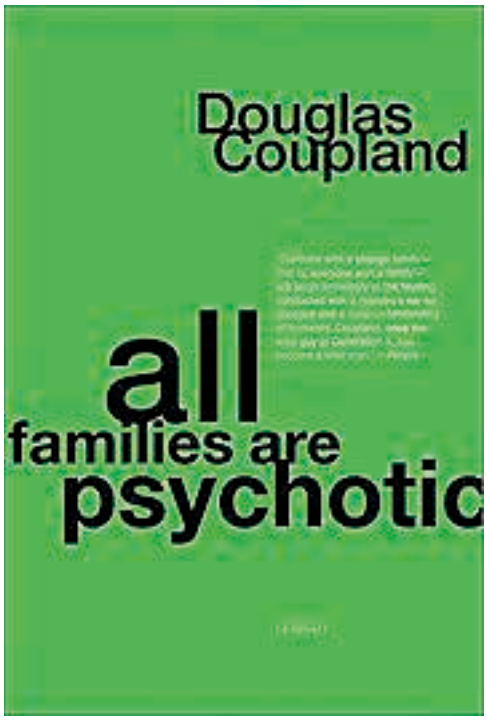
[1] ゲーデル・エッシャー・バッハ　あるいは不思議の環、ダグラス・R・ホフスタッター著、野崎昭弘、はやし・はじめ、柳瀬尚紀訳、白揚社、1985.

[2] 信頼性の高い推論　帰納と統計的学習理論、ギルバート・ハーマン、サンジェーヴ・クルカルニ著、蟹池陽一訳、勁草書房、2009.

～記憶に残る一冊～

“All Families Are Psychotic” by Douglas Coupland

一般科文系　Tomek　Ziemba（トメック　ジェンバ）



（日本語要約）

この本は私が高校３年の時に英語の先生に進められた本です。実は当時、英語がかなり苦手で読むのを諦めました。しかし、この本はとても面白くて、久しぶりに最後まで英語で本を読めました。作者はカナダ人の日本好きなライターで、よくタブーの話題をメインにして物語を書いています。

今回の彼の作品は「どの家族でも精神病になる」と言った題材で、ごく普通の家族が様々な問題をどうやって乗り越えるかと言った体験談になります。この物語にはあり得ない話もたくさんありますが、考えれば実にあり得る話しであって、とても面白くて感動的な作品です。

高専には英語が苦手な方が多いのですが、英語が苦手だった私でも最後まで楽しく読めたこの作品を読んでみてはいかがでしょうか？

A story about family realities, some being often too taboo to be written about. You'll be surprised as to how much you can actually relate to these taboos yourself!

When I was in my last year of high school in Canada, I hated English. English was not my first language, or even my second (its my third), and I never got good marks in English class. My English teacher knew this, and tried to get me to like English more by making me read this book for a book report. The author is Canadian, but also a Japanophile, and has even turned his stories into movies.

The story of the book is about a family and all of their misadventures in real life. A lot of the content is very straight forward, and sometimes shocking, but all believable, real-life stories about the trials and tribulations of families. His writing style is very unique and memorable; for example one of the characters in this book is called “Shw”, which is actually based off a Japanese name.

It might be difficult to read at first, but the more you stick with it, the more interesting, the more surprising, and the more emotional thestory gets. By the end, you’ll wish the story wasn’t over! Please try reading it sometime!

I'm very greatful to my English teacher in high school introducing me to this book, and getting me to like English even more. If it wasn't for her and this book, I would have never voluntarily wanted to read any books in English. I have read other books of his, for example Generation X and jPod(which ended up having a TV version of it) and they were just as interesting as this book, All Families are Psychotic. He released a new book last year called Worst. Person. Ever. which I have yet to read, and would like to sometime soon! If you want to know about other English books you might want to read, don't be shy and feel free to come and ask me! I have many English and other language books in my office that I can lend you as well if they do not have them at the school library!

～記憶に残る一冊～

「はだしのゲン」　中沢啓治 作

機械工学科　　山本　通

本原稿の執筆依頼が来て、私が最初に感じたのは、教員でありながら最近は工学書や学会誌しか読んでいないという情けなさと、そのような自分が、このような原稿を書かせて頂いて良いのかという戸惑いでした。しかし、お断りするわけにもいかないだろうと考え、これまでの古い記憶をたどってみました。すると、文庫本ではないのですが、小学生の頃に学校の教室に置いてあった唯一のコミック「はだしのゲン」が私の記憶に深く残っていると気づきました。そこで、この本を私の思い出の一冊として紹介したいと思います。

「はだしのゲン」は、作者の中沢啓治氏が、自らの広島での被爆体験を元に描かれた自伝的要素の強い作品です。その内容は、主人公の中岡元が、原爆で父、姉や弟を失いながら、焼け野原の広島で力強く生きる姿を描いています。同時に、筆舌に尽くし難い原爆での被害の凄まじさが絵で表現され、この本を初めて見た時、小学生ながら、ものすごい衝撃を受けたことを記憶しています。なぜ、こんな悲しい出来事が起こったのか、作品中にもあるようになぜあと1週間早く戦争を終えることができなかったのかと子供ながらに思いました。また自分は、平和な時代に生まれて良かった、戦争は絶対にしてはいけないとも強く思いました。

その後、私の中では、「はだしのゲン」は記憶の片隅に置かれたままでしたが、2012年に、この本の作者が、亡くなられたことが新聞やニュース等で報道されました。当時、私は企業で新しい機械の開発をするために、アメリカの航空機産業の動向調査等の仕事をしており、仕事で使う英語力を向上させるために会社近くの英語教室に通っていました。そこでは、毎回、英語で「What's new?」を話さなければならないのですが、ある時、中沢氏が亡くなられたこと、「はだしのゲン」が小学生の頃の私に大きな衝撃を与えたことを英語で紹介しました。私のクラスには小・中学校の先生、大学教授等の年配の方と高校生(1名)や大学生(2名)がいましたが、その高校生や大学生が「はだしのゲン」を知らないということを知り、驚きました(逆に年配の方は皆知っていました)。私の子供時代と同様に、今の若い人達も平和教育等で、この作品を両親や先生などから紹介されているものだと思っていたからです。

そして、昨年、この作品に関して、ある市の教育委員会が「描写が過激」として、学校の図書館の本棚には置かず、自由に閲覧できない状態にしたということで、マスコミで大きく取り上げられました(その後、閲覧制限は撤回されました)。子供の頃にこの作品を読むことで、戦争の悲惨さや愚かさを実感していた私は、この教育委員会の措置が理解できず、インターネットで新聞記事等を調べてみました。それによると、例えば、「作品内では、旧日本軍の残虐行為がまるで軍全体の方針であったかのように描かれている」という意見や「間違った歴史認識を植えつける」というような意見があるようです。

今の若い人達が、「はだしのゲン」を知らなかったのは、このようなことが背景にあり、学校の先生が生徒に薦めにくい事情があったのかも？と、その時になって思いました。

確かにそのような観点から見ると、過激な表現等もあり、この作品の評価が人により異なることも理解できます。しかし、原爆で家族を失ったどうしようもない悔しさや悲しみ、戦争に対する怒り等、作者の気持ちも痛いほど理解できます。なにより、原爆投下直後の様子やその後の後遺症に苦しむ人達の姿が非常にリアルに描かれており、いかに戦争が酷いものかを知ることができる貴重な作品だと思います。新聞記事等にもこの作品は、「戦争の悲惨さが伝わる」や「平和学習の参考になる」のような肯定的な意見が多数あることも付け加えておきます。

そして、もしこの本を読んだことのない人がいれば、その内容について賛否両論があるということを知って、読んでみて欲しいです。そして、悲惨な戦争を体験された先人の一つの意見として、平和について考えるきっかけとして頂ければ幸いです。

最後に、余談ですが、最近、日本と隣国との関係が急速に冷え込んでいます。我々、日本側の報道から考えると、中国の尖閣諸島に関する対応、韓国の告げ口外交は、明らかに度が過ぎていて、日本人として腹が立ちます。一方、中国や韓国側も、自国の利益優先の報道をしていると思いますので、日本に対して嫌悪感を持っている人は多いと思われます。しかし個人個人では、中国や韓国の友人と関係が良好な方が多いのも事実だと思います。個人間の問題とは異なり、この国家間の問題は簡単に解決しそうな状況にはありませんが、先の悲惨な戦争を繰り返さないためにも、まずは相手を尊重し冷静に意見を聞いて隣国と付き合うことが我々にも隣国にも必要だと思います。個人個人ではできるこんな当たり前の事が国家間でできないわけがないですよね？

平成２５年度　学生図書委員名表

学科 / 学年	任 期	機械工学科	電気電子工学科	情報工学科（制御情報工学科）	都市・環境工学科（都市システム工学科）
1	１年	高橋　雄文	長谷川　慧	上杉　咲	碓井アテナ
	前期	川野泰士朗	新銅　惇朔	齊藤　柾孝	矢上　英里香
	後期	川野泰士朗	志賀　大悟	齊藤　柾孝	矢上英里香
2	１年	渡辺　圭祐	髙野　修平	内田倫太郎	佐藤　克哉
	前期	矢野　智大	相澤　優也	伊藤　有汰	山田　麻矢
	後期	矢野　智大	佐藤　建	山内　杜夫	森田　真由
3	１年	髙木　洸	藤江　竜也	吉田　龍矢	大山　太郎
	前期	姫野　啓太	○平野　瑠唯	○小谷　朋生	坂本　春樹
	後期	麻生　和暉	平野　瑠唯	小谷　朋生	坂本　春樹
4	１年	幸　和範	◎立川　亮太	三浦　晴成	染矢　圭祐
	前期	渡辺　拓馬	秋月　貴裕	嶋田　裕行	梶原　雄二
	後期	横尾奎志郎	秋月　貴裕	南　直人	梶原　雄二
5	１年	高橋　直生	亀井　雅貴	佐藤　諒	下津　航輝
	前期	藤原　敏博	末松　直貴	松尾　直起	山崎　湧暉
	後期	藤原　敏博	宇都宮光拓	松尾　直起	山崎　湧暉

＊図書委員は上段が１年任期　　◎学生図書委員長　○学生図書副委員長

平成２５年度　貸出上位者・クラス表彰者

順　位	クラス	氏　名	貸出冊数	順　位	クラス	貸出冊数
第１位	５S	長生　まゆみ	１７５冊	第１位	４S	３３７冊
第２位	３C	吉武　愛佳	１２６冊	第２位	５S	３０４冊
第３位	２S	相澤　瑠奈	１１２冊	第２位	５C	３０４冊
第４位	５C	川嶋　建吾	９８冊			
第５位	２S	尾崎　光	８３冊			
第６位	３S	山田　雅心	７３冊			
第７位	２C	山田　麻矢	７１冊			
第８位	４C	村上　慶行	５８冊			
第９位	５C	清　康太郎	５７冊			
第10位	２AES	衞藤　慎悟	５５冊			

編　集　後　記

図書館報129号を編集するに当たり、お忙しい時期に原稿の執筆を引受けて頂きました方々に感謝申し上げます。本校にもネイティブの英語教師としてトメック先生が赴任されました。トメック先生は日本語も上手なのですが、学生のためにやさしい英語で図書を紹介して頂きました。海外インターンシップを始め国際化が進み、英語が重要になりましたので、図書館もこれまでより一層英語の図書を取り揃え、学生の英語力アップに貢献できることを希望しております。今年度は開校50周年という記念すべき年でもあり、これまでの50年の歩みに負けないように、図書館も一層の充実に努めたいものです。